

Case

4

トーストマスターズクラブで練習し、仕事で実践する

「人を見る物差しは一つではない」

人を育てるスキルをひたすら練習する場がある

外資系国際輸送会社
経理課長

石堂 優子



「今日が私の最後の日ですからお話します。私は、あなたの下で働くのがとても辛かった。私なりにいつもがんばったのですが、あなたに仕事を評価していただけたことはありませんでした。あなたの期待に添いたくても添えない。とても悲しかったです。」

そう言い残して部下は、石堂さんのもとを去って行った。今から5年前のことである。

★・★・★・★・★

石堂優子さんは現在外資系国際輸送会社経理部門において4チーム約20人のメンバーを率いる課長職にあり。

「今思えば、当時の私は一つの物差しでしか部下を見ていなかったのです。」
そんな石堂さんが5年間で大きく変わったのは、トーストマスターズクラブ（以下TMC）に入会し、継続的にコミュニケーションとリーダーシップのスキルを磨いたからだという。

トーストマスターズとは1924年に米国カリフォルニアでスタートした「スピーチを通してコミュニケーションとリーダーシップを学ぶ」非営利の教育団体だ。

石堂さんは、仕事で使う英語を一段も二段も上のレベルに高めることを目的として東京バイリンガルTMCに入会した。

★・★・★・★・★

「TMCでは、教本に基づいてスピーチを発表するのですが、必ず会員から自分のスピーチに対する論評をいただくのです。この論評には一種の型があつて、良かった点と改善提案をスピーカーに伝えます。ポイントとはスピーチをした人のモチベーションがさらに高

まるようなものであることです。ダメだしだけではダメなのです。」

石堂さん自身もこの5年間で数え切れないほどたくさんの方のスピーチに論評を行つてきてそこで大切なことを学んだ。

「人には、その人なりの持ち味が必ずあるということですので。その持ち味を大切にしていかにしてさらにその人の力を引き出すか試行錯誤してきました。ひとつの物差しではなく、その人にあつた物差しで見なければうまくいきません。」

★・★・★・★・★
石堂さんは論評だけではなくスピーチもたくさん行う。

「スピーチで最も大切なのは何を伝えたいのかだということ学びました。そのためにもどうしたら伝わるのかも懸命に考えてきました。」

た。」

5年間のトーストマスターズの経験で、英語というスキルを使いこなす前のマインドセットの大切さに気がついた。

「以前の私だったらとくに外国人と話す前にどうせ伝わらないからとあきらめてしまつていたことも多かったのですが、今はあきらめずに伝えきるまでがんばるようになりました。」

多くの仲間から論評をもらい石堂さんは自分のそして人のさらなる成長の可能性を確信した。

その後、縁あつて東京インターナショナルTMCの立ち上げに参画、また2年前から日本語に特化した輝TMCにも入会しさらに学びを深めている。

★・★・★・★・★

3年前から石堂さんは担当する4つのチームを毎月一回一堂に会してイベントを行つている。メンバーが自分の仕事、自分の関心事を十分程度スピーチを行

い、聞いているメンバーがそれに対してフィードバックを行うというセッションだ。

「もともとトーストマスターズのフォーラムを利用してチーム間の情報共有を促進するためでしたが、自分の隠れていた持ち味を仲間のフィードバックを受けて初めて気づき自分に自信が持てるようになるという効果が出てきました。自分に自信が持てれば相手も尊重できます。3年やって組織が強くなりました。物差しは一つではないのです。」

ISOの環境・品質基準に基づいて行われる社内監査でも石堂さんの部署は年々成績が高まり組織の成長を客観的に実感できるようになったという。

★・★・★・★・★

個人の持ち味を認め互いに尊重しあうそんな環境によって組織はさらに強くなる。人も組織もまだまだ可能性があると石堂さんは心から信じているとお見受けした。◆